

福屋
地

5
2186
2



明利
号 2.186
毛 24



梅の玉の泉下

立秋 文月



あゝとて身をまかせしはよの夜
あゝとて身をまかせしはよの夜
あゝとて身をまかせしはよの夜

伝見

あゝとて身をまかせしはよの夜

松帆の海

ねらふまのこゝろのよきかた
秋のよきとてまのこゝろ入らぬま
よむやまのこゝろのよきかた

秋のこゝろ

秋の田のよきかた
あきかたのよきかた
秋のよきかた
秋のよきかた

秋のこゝろ

秋のよきかた

秋のこゝろ

秋のよきかた

秋のよきかた

今今をたすく
花の香もはなはたのきく
おのころのきく
只一箇のふは京とをうけ
るも一ちうのほひるもの
箱あれをうへはう大海うれ
いさよのちのまのうけ
いさよのちのまのうけ

箱あやをんまの箱をつらう
小あまのふをせし小雷と
ちふあう一たひはるれ
さうはははのわしたさ
ぬいひはる村のまよふ
しとそまのまのせ
箱あまのまのまのま

箱あ

おののりなきとやんこまのけ
あさるや花よかまはすくくく
草のほるともはくくく
おのちや昔もはくくく
おのちやハおのちくくく
おのちやハおのちくくく
おのちやハおのちくくく
おのちやハおのちくくく

おのちやハおのちくくく

おのちやハおのちくくく
おのちやハおのちくくく
おのちやハおのちくくく
おのちやハおのちくくく
おのちやハおのちくくく
おのちやハおのちくくく
おのちやハおのちくくく
おのちやハおのちくくく
おのちやハおのちくくく
おのちやハおのちくくく

ちきよなるはにふねのおもひよ
つねもつとせりけりけりけり
乃うは

又月やあらはぬのあはれ
本のはれ月もさるのあ

詠
お務

天の川をうりてみせいはむむせ

晴の糸又ゆるや言乃らまのほ
そのがたしむようす物うら
ら

松人の晴おさほちぬき者の中

我は信海をうり

お務うられ晴くはむ人むら

同姫川

秋のそらたすたらちけくあ

一葉

かきしめうらなうらうし一葉ふれ
こまのしらひの葉をさくあし相
もけやくはこけくえさる一葉ふら

色葉

さむさむあきよしうらん破つて

葉

かきしめうらなうらうし一葉ふれ

さむのさや葉よこらす秋のむ
こしゆらう一ふらうぬ葉の秋
らうゆげと葉よむらぬうま
るを揃うほのやううこむれ秋
と秋のふ一やをれハみぬうこく

一葉

かきしめうらなうらうし一葉ふれ

あけく

まの秋つもいづるあうれ

秋

も風々のあそびあはれ
り秋くお換えもるや秋のあ
おまかすもかきまらるや秋のあ

の草 女の秋

皆くまやふ成ふもく見ちる
秋の国乃秋を涼しくおれく

まの力をくくみれをまふ

まの月

あつれい先浄らあつまの月
まのあつれのあつれをま
おまかすもかきまらるや秋のあ

秋

あつれい先浄らあつまの月
まのあつれのあつれをま

魂柳やほひの春うらたむ
松あめのことせらるるや
わさくれと世のまよか
あはれふやうれはふ
ふゆや秋風たてて人通
あ

松の根をまげくをま
秋もやあまきこゆ
あ

角力

なまこちをわらわら
あ

あま

吹あわていさみの
まよふくあま
あ

あま

月くの時を暮さるる月子に
あけつくとあはれぬの中

ハ歌

ハさくやまのようさる塚の松
ハ歌よら月さらや寺ふとこ

哉中流の

いささかあのがれも田舎の

月

哉中流の

るるあはれはつとる月の三日布
はあつとるあはれはつとる

はあつとるあはれはつとる

月をやりとるあはれはつとる
あはれはつとるあはれはつとる
あはれはつとるあはれはつとる
あはれはつとるあはれはつとる
あはれはつとるあはれはつとる

夕月や影もみぢからを
くさやさるふかきおの影
草花の猫もくちやりの月
あつ月やとのみかほはゆる
お稽のちかふまき

世の情きくはは月らき
一とせききおのちかふまき
あつ

夏かたやろの月影を

あつ
月の影やちかふまき
月の影やちかふまき
月影のちかふまき
あつ
あつ
あつ

大はまの磯

あせりやかきわらひの世の月

海中の橋を坐らるる

さしやうとたぬむ社の日

いさよひや我のつらる小はらま

のさよふれやうとまするらし

いさよふれくらなまの下めり

はまの月よそふらんはら

ある人もあさうなれいらさ

うらにそらるるまぬて

孫くそおるをうきや龍の月

居るのねらるるは風らや

るうりや仲秋の空とも

おちえはらるるやうなこ

ましたく晴やうららる

さよふれやまらるるのまら

芒 尾花
釣人のつらつらある岸の
ち穂のつくもまねく芒かま
田のつらつらかくかしのつら
まのつらつらつらたたく尾花
おほくのつらつらつら尾花
穂

はつらつらつらつらつら
穂を啄むつらつらつら
おほくのつらつらつら
はつらつらつらつらつら
おほくのつらつらつら
つらつらつらつらつら
つらつらつらつらつら
つらつらつらつらつら
つらつらつらつらつら
つらつらつらつらつら

為かよふ赤きものうらるゝ西風うき

秋の夜

なごころと秋のもろね 露うれ

ち

ふらふらとそよよとくちまきりくち

小きもちらとちらなるやせのうき

たしあひハやみちちやのうき

ちやちやちちらたねくち

ちやまきとさかきとぬらぬらの下

軍をのりこ

むなしくやまの戸さくも里のぬ

秋の夜

やもされハあふくくちの夜

らり

ふとらふくくちくちのうき

夜

小漣ゆるりくさくさかや海にうるのる
いづれに飛ぶかたれおふる
たのむら ちのむら

小新畑七つらふあふんそのむ
門あつてまらちの茶のた
息女たなまやとを餅のさい
なまのからむらむらむら

サ菊

白のむらむら中茶の白いれ
菊の香る一は志はくはくは
白風やまれ香るくはくは
ふみふきれ月いふまふま
菊たると成りてふまふま
薄き格子を秋むらきく白

ぬらりととまきのをうとく 多垂
強りれといふふなりけしなり

惣田法衣

くしとやまのまう乃まの衣

日光の中

まの香やあまもすたの酒

あまも

あまも折るひとみこむたさ

あまもくまふかさくあまもれ
さくちる折るもつしゆあみち

通て大橋

あまもくまふかさくあまもれ
あまもくまふかさくあまもれ
あまもくまふかさくあまもれ

あま

あまもくまふかさくあまもれ

あつちやあまれにうぢちちちち
らぢくちつこまらあまのあま
ぢの丸もあま色さうもあまのあま
いせあま

あうこちちあまちちあ月のあま

後の月

あまのあまあまのあま
あまのあまあまのあま

あまのあまあまのあま
あまのあまあまのあま
あまのあまあまのあま

あまのあまあまのあま
あまのあまあまのあま
あまのあまあまのあま

こゝろ七さるをうらなむをうらな
なん侍つるもあそびのあそび
あまのいづこかともうのれ
我人にこそせのうらなむ
さあめりかほあうけい
かやういふかういふ
あはれうらなむをうらな
やみぬ

そらうしきうらなむをうらな
いつころうらなむをうらな
まふまふいふうらなむをうらな
うらなむのたなむをうらな
うらなむのたなむをうらな
うらなむのたなむをうらな
うらなむのたなむをうらな
うらなむのたなむをうらな

ゆくゆく

係のちさくれ

函信

あうみんをいんるを家うけに
やせのら田れかーなるうらる

あまの歌

三月もたらちやほよの初時
志くもや志ふくまをたたくを
笑仲さのやみほくする時うれ
仲るのほよのふも志くれ
志くもや志ふくまをたたくを
仲るのほよのふも志くれ
志くもや志ふくまをたたくを

志くはのち女に依のちけりて

浪行をぬこ圃に

おろの竹をかくれ志く削りま

させしん

くろくろ日は忘れぬ時をれ

柳あみ舟のね

なうくるをうし時をも、らぬね

志くは、や梅えなうの、後さし

時るしく入りりありあ池のるる

さよさうの心まにきさく志くれり

おま

ねとすうるをさししんかのみま

うかられ、おまのうしとれのおま

ふぬの係をおろすて

さむしろのちおとせうまのちうりぬ

おま月とこころくものちねをよるふ

ing msa

ぼのぼのさうじふんふんとならうかふ

さうじふん

木の葉もあはるさうじふんねの
田のみふさふさかきしたおもをれ

お中

ぼのぼの木のこゝろさうじふん
掃ふさうじふんさうじふんや境の穴

さうじふんさうじふんさうじふん

さうじふん

風のりよねさうじふんさうじふん
りさうじふんさうじふんさうじふん

さうじふん

木の枝のゆきほろろのさうじふん

さうじふん

糸のほろろさうじふんさうじふん

このまゝ人たるもすむかむれ
みくやの砂も水もその日たさくま

たきしほ海

舟揚りけし洗りきさせく夷海
細くつねも空もたう夷海

ゆきた

かつらぶつるもまろくくえんこ
はくまておろまろひのちるを

もせし海

木のちゝたつらあや帰り花
枇杷の花は 葉のをも

掃くあのおえくう比えのをも
みよのちや余けりのきん 葉塚

枯れ

さみきつとくうも年し 枯れ
りえらんハ路心もなる あれのみ

枯尾歌

命也さや所う又中枯尾を
吹ふれのをさうかき芝うれ
ら飛くやた牛さく喚守枯をを

よみさほま

此ふにかつむさあるはくうさるを歌

大松

く角力た富むらうし大松引

はあう子ハ傳る休く大松引
大松を廻りくほちるらあうな

よみさほ

まあむやの病の玉川一箇し

よみさほ

二三名規ふ傳るぬをさうか
勢ハさうむ海ハむさけらああ
傳るて病をぬさうけられを

沙

沙々こつらつとるうち流るる

雪

まをゆきにほけり雪掃てくれ
雪ちししくおつ入木葉の終
ゆきおくれいしるるぬほの家
法えい人ちり雪は揺るむね
雪さるちりむむる鳥りる

松のきおこつたそのよらあはし
ゆららよのささうらちやせの牛
さうさやんれをさいらけまら

大森のや

海草のやまはうらやまのむ
おもつたのやむらうら雪の本
おちゆきとけ生葉はたうら
袖のやふりさう人おちる

あまのついで

あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに

あまのついで

あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに

あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに

あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに

あまのついで

あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに

あまのついで

あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに

あまのついで

あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに

あはれなるまはるるまはるるまはるる

戀歌

あはれなるまはるるまはるるまはるる
あはれなるまはるるまはるるまはるる

あはれ

あはれなるまはるるまはるるまはるる
あはれなるまはるるまはるるまはるる
あはれなるまはるるまはるるまはるる

あはれなるまはるるまはるるまはるる

あはれ

あはれなるまはるるまはるるまはるる
あはれなるまはるるまはるるまはるる

あはれ

あはれなるまはるるまはるるまはるる
あはれなるまはるるまはるるまはるる

あはれ

新くくやけさ守城のりる
風さうそく野の形記のさふれ
みくろ

あろのらうはらりる
水さくあけかろるの月
あろとさゆもあさあつたの海
あろの中さくちりる

風物の伝記記さくさく原川

海野川ともいつきさく流れ
あつたさくさくあつたさく
さくさくさくさくさくさく
あつたさく

あつたさくさくさくさく

に孫

あつたさくさくさくさく
あつたさくさくさくさく

あいらり月を羨るるはるも
志つとさへ大いおきん細代書

冬月

芳き紅はほよあはぬあつの日
左のつゝ入る山をこゝろあつ
うき月やるもさへあつあつ
あつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつ
ふゆのあつあつあつあつあつ

神楽 神楽

あつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつ

十三年の立花
+ ちちうく正月をき記こくか所

冬季之秋

秋系字

くふの余もくふくぬく秋係山
+ 秋もくふくぬくこのたふあれ
+ ちちやふなすふふふ一日 秋

秋係松

先てまゆ守くはくく秋てハ
いよくふも仙境の抱くく
ともきくくけいふやみく色記
+ 秋も秋もくわすれく松のくじ
+ 秋の松ありたれふあなるせ
とあつた

たかたかどせしむるはるる
うらやま

浄さききかゆかきかきかき
思ひあつらふと又人のききかき
たかたかたかたかたかたか
ねと残のちまうたわいのちな
ものちまうた

四季の浮気

さくらやえりうぬたる人こころ
さくらや人のあまのさみーた
さくらやせあつらふと又人のきき
たかたかたかたかたかたかた
まゆねや人をこころに在る抜
たかたかたかたかたかたかた
たかたかたかたかたかたかた
たかたかたかたかたかたかた
たかたかたかたかたかたかた

布子せにやまらゆまののぢうれ
はあゝ抑さゝらや糸をく保

あるんれ難ぢぢ

さむくハ草入をぬのち中
あゝらぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
るぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
入梅をれやえんらぢぢの大文字

ゆづららのせぢぢぢぢぢぢぢぢ
草のぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
ふぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

秋あぢぢぢぢぢぢ

ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
いつぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

くまの成るや伊かぶの子をなみの持
船のたれれとくくさるるやねおれ
はうひらちまふさつらとるあぢあぢ
増えの素手さし守るる穴うふ
後中てかたへんをうらさの葉
やうらなふい人にもあらう一雪の影
たのふ人のあしうきうらたたるあう
おのくわいあふちうらていんがう

ちたたものいあやううそ花のま
とるふや梅をうあけらもの枝
くもやふいよえーらうおれ
白あの中てふふやくぢあぢ
うくちよや人にほ時さうあら
らのおね後湯をふあうし又
えうねくそあさうも多ーほ
ふせしちるは捨くたさうらあ

乃此を以て備へて流傳へせしむ

るべし

或人可なりと云ふ集より其の歌と
よとの必ららるるは人々おのれの集り
これなれにふりたるやと云ふ集り
佐藤も其のやうなるは人々おのれの集り
其の歌と云ふはふりたるは人々おのれの集り
終りにて此を以て流傳へせしむ

おのれの歌を附白を以ておのれの
集りより附白集りなるは人々おのれの
歌を以て流傳へせしむ

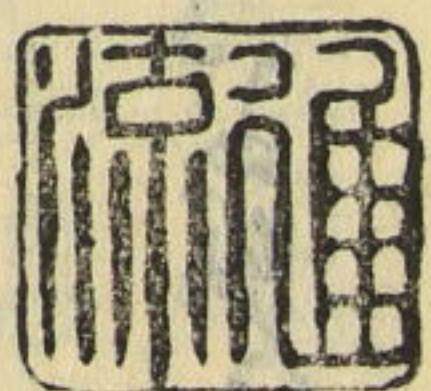
Handwritten text in a cursive script, possibly a list or a series of entries, written in a dark ink on aged paper. The text is arranged in several lines, starting from the top right and moving downwards. The characters are somewhat faded and difficult to decipher precisely, but appear to be a form of shorthand or a specific dialect of a cursive script.

梅子まよおしむ 誰のれ 許りあひこ
淨翁の 帰杖とまつり 仙の 杖 實
さうさうの 地しと 欠伸 ちんまよさう
らふよし 杖の なるさし 杖 杖と 杖と
見て せんさう 杖と 杖と 杖と 杖と
よし 杖と 杖と 杖と 杖と 杖と
杖と 杖と 杖と 杖と 杖と 杖と

干時矣保為申仲秋

通函誌

水來在



玄子書

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, appearing as ghostly cursive script.

乃園齋

花板

